

天照大神の孫が高千穂に天降った。

天孫の二代目は竜宮城から戻って来た！

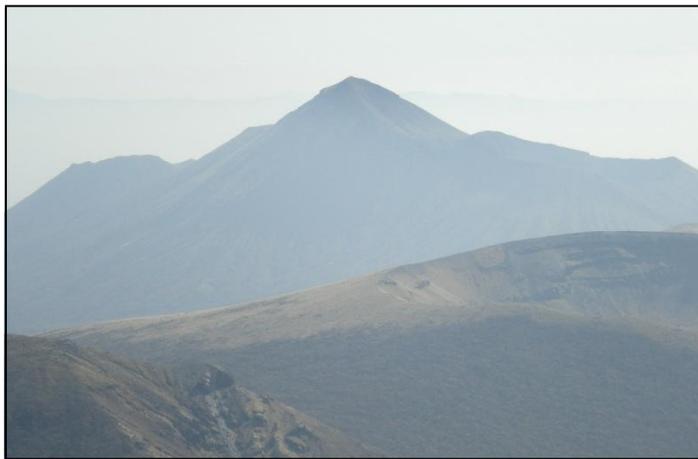
■ 5-1 天孫が降臨した高千穂・クジフル岳

鹿児島空港に降り立つ前に、立派な山を見た。富士山や南アルプスを見たあとだったが、それら以上に美しく立派に見える山があった。霧島山中の高千穂の峰である。古事記には天孫ニニギ命は日向の「襲(そ)」の高千穂の久士布流多気岳(クジフル)に天降ったと書かれている。

日向は宮崎県のことで五ヶ瀬川の上流の高千穂がその山だとの説がもっとも信じられている。古事記の訳者の梅原猛さんも宮崎県説をとっている。それを信じて宮崎県の高千穂を、阿蘇山経由で訪れたことがある。その地に立つと「なるほど、ここが天孫降臨の地か！」と感心した。さらにクジフル岳は近くの九重(クジウ)山ではないかなどと考えたものだ。

ところが霧島山城の高千穂の峰を空から見たら、「こっちのほうか、クジフル岳だ！」と感を強くした。活火山なので植生はなく、すっきりとした三角錐があらわれている。天上から神さまが見たら、「ムムッ あの山に降りよう！」と思うに違いない。神さまはふだん神社にはおられるわけではない。「ひもろぎ」という「場所」あるいは「もの」にときどき降臨される。その典型は京都上賀茂神社の神楽殿の前にある大きな三角錐の盛砂である。よく見るとその頂点には松葉が三本さしてある。これが「ひもろぎ」で、ここに神さまが降りてこられる。すばらしい光景と物語りと私は思っている。上賀茂神社に行くたび、三角錐の上にちゃんと松葉が立っているかな？と注目している。

クジフル岳に降りたニニギ命は次のようにおっしゃった。
「この地は韓国(からくに)に向かっており、笠沙の岬にも道が通っている便利な場だ。そして朝日や夕日がよく照り映える国だ。」



そして太い柱、高天原に届くほどの千木を高く上げ、立派な御殿をおつくりになった。その御殿が霧島神社だ。しかし残念なことに高千穂岳の噴火によって御殿は焼失し、その場所には古社跡しか残っていない。

■ 5-2 頂上の逆鋒を坂本龍馬は引っこ抜こうとした。

幕末の志士、坂本龍馬は暗殺の危険がある京都からのがれ、薩摩に一時避難した。その時におりょうさんと一緒に高千穂の峰に登山した。これが日本人初の新婚旅行だと言われ、高千穂は新婚さんのメッカになった。龍馬は頂上に登り、逆さに刺さった剣を引っこ抜こうとした。この剣は大国主命が国ゆずりの際に高天原に差し出した剣で、奈良時代にはすでに頂上にあったとの記録もある。現在の剣はレプリカだが、その昔の剣は青銅器だったにちがいない。龍馬はなぜ引っこ抜こうとしたか分からないが、私は出雲の荒神谷古墳で発見された青銅器の剣の一つで、スサノオ命からヤマトタケルに伝えられた「草なぎの剣」だったらおもしろい、と私は思っている。

■ 韓国岳に登る

えびの高原へ行くバスに乗ったら韓国(からくに)岳に登るといふ小学生でいっぱいだった。「小学生が登れるなら、私だって！」しかし二合目で足が痛くなった。その半年前にアキレス腱が断裂し、4か月ほどギブスをはめていた。その時はほとんど治っていたが、再断裂したらもう治らないと言われていたので、慎重になり、下山。新燃岳のふもとの新湯温泉にいった。この温泉は酸性が強く、肌はピリピリする。友人の温泉達人・賀曾利隆さんから「ケガなんかすぐに治りますよ！」と前から言われていた。翌日、再度韓国岳登山に挑戦した。賀曾利大明神の威力か、高千穂の神の御威光か、アキレス腱に異常はなく、小学生の後ろについて行けた。

翌年、新燃岳が大噴火をした。霧島、桜島の火山は神話の時代から、活発に活動していた。桜島のヒメ神は噴火のさなかにお産をしたという。



韓国岳の頂上から真下に真ん丸な火口湖が見えた。大浪池だがその姿は神々しい。ちょっと目を転じると高千穂の峰が屹立している。アキレス腱が心配だったが登ってよかった。

ニニギ命は高千穂に天下って、「この地は韓国に向かっている」と言った。韓国とは韓国岳のことだった。

■ 5-3 初代ニニギ命は桜島のコノハナサクヤヒメと結婚する。

高千穂の峰に降臨した天孫ニニギ命足跡は南九州各地に残っている。歩いて回れる距離ではないのでレンタカーを借りた。アキレス腱が切れてから久しぶりの運転。「はしゃいでもう一度切れたら、もう回復はしないのだからね」と奥さんに念押しされているので、慎重に運転してまわった。

■ 霧島神宮(祭神:日向三代の初代ニニギ命とコノハナサクヤヒメ)

天下った高千穂の峰に御殿を造ったとあるが、ここ鹿児島ではその御殿が霧島神宮とされている。元の宮は高千穂の峰の中腹(海拔 1500m)にあったが1400年前に噴火で焼失し、現在の場所まで下がって来た。

現在の霧島神社は島津家によって造られたもので、なかなか立派だ。祭神は当然ニニギ命だが、奥さんの木花咲耶比売(コノハナサクヤヒメ)も祀られている。コノハナサクヤヒメは火を噴く火山の桜島に祀られている地元の国津神だった。

笠沙の岬に出かけたサクヤヒメを見ていたニニギ命は、大急ぎで岬に出かけプロポーズする。サクヤヒメの父の大山津見(オオヤマヅミ)神は「それはすばらしい」と言って、姉の石長比売(イワナガヒメ)と一緒にニニギ命に嫁に出した。



<現在の霧島神宮>

ところがニニギ命は、自分が結婚したいのはコノハナサクヤヒメで、器量の悪いヒメはいらないと姉だけを追い返してしまった。大山津見神は怒って言った。「イワナガヒメを嫁がせたのはニニギ命の子孫が岩のように丈夫で末長くあれと念じてのこと。送り返したのでニニギ命の子孫は木の花のようにもろくはかないことになる」ニニギの子孫の天皇の命が長くないのはこのようないわれがある。

ニニギ命は、さらにひどいことを言う。妊娠を報告したコノハナサクヤヒメに対して「一夜の契りで子ができるはずはない。腹の子は地元の神との子にちがいない」温厚なサクヤヒメも怒った。

「まちがいでなく神(ニニギ命)の子です。神の子は例え火の中でも無事に生れます」と言い、産屋に火をつけて猛火の中で三人の子どもを出産した。

ニニギ命がそれを聞いて何と言ったかは古事記には書いていないが、ともかくこのお二方が日向三代の初代である。毅然とした女性のコノハナサクヤヒメは人気が高い。しかしセクハラのニニギ命は人気がない。それはまあしかたがない。

■ 5-4 二代目の山幸彦、猛火の中で産まれた

日向三代の神さまは約 600 年間高千穂に住んだと古事記にはある。西暦 2013 年は皇紀でいうと 2673 年なので、神武天皇の即位は今から 2673 年前のことだ。その 600 年前だからニニギ命の降臨は 3273 年前ということになる。

古事記にかかわった人にとってはこの年代は神さまの時代で、大変古いと考えたのだろう。しかし神さまは空間も時間を自由に行き来するので、この年代に意味はない。

初代夫婦は 3 人の子どもを産んだ。

長男が火明命(ホデリノミコト)、……海幸彦

次男が火須勢理命(ホスセリノミコト)、

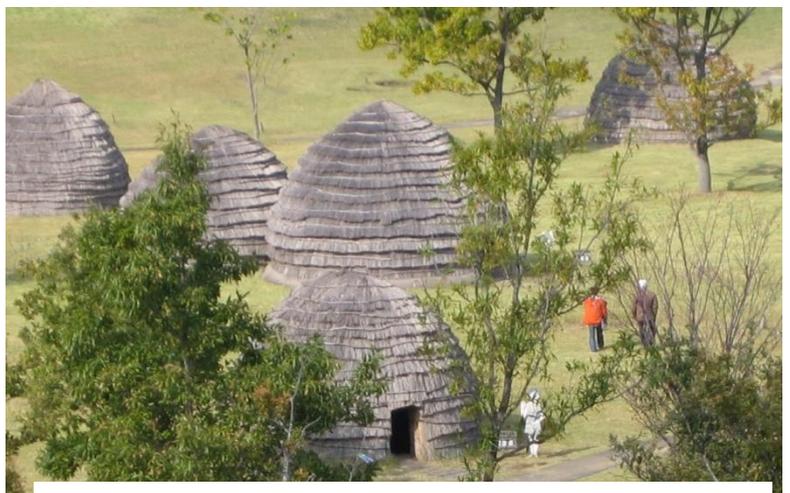
三男が火遠理命(ホオリノミコト) ……山幸彦

長男と三男は海幸彦、山幸彦 として知られるが、真ん中の火須勢理命の名前はまったく知られていない。

山幸彦が兄の海幸彦を追い落として日向第二代を継ぐことになる。末子相続はこの後も続く。兄弟の争いは、日向三代の中でもっとも重要な事件で、だれにでもわかるようなお話しにして詳しく伝えられている。天皇家の成り立ちの中で、海の民族と山の民族との間に争いがあったことを示唆している。

■ 鹿児島神宮(大隅一宮:祭神:日向二代目 山幸彦と豊玉姫)

JR肥薩線の隼人駅ちかくの京セラホテルのテラスで豪華ランチをとった。眼の下には「天降川」がある。駅の名前は「隼人」。新館との通路には国分にある上野原の縄文遺跡からでた遺物が展示してある。



<国分の上野原縄文遺跡・・・神話のにおいがする>

この遺跡は青森県の三内丸山遺跡とおなじ縄文遺跡。上野原はあまり知られていないが、南九州は古くから多くの人が住み、集落ができていた。古事記神話は縄文よりも新しい時代の話だが、南九州には時間とは関係なく、神話のふるさとの雰囲気醸し出される。

■ 海幸彦と山幸彦の争い

三人息子の末弟の山幸彦は長男の海幸彦と同様に自分の仕事に打ち込んでいたが、あるとき気分を変えて仕事をとり変えようと提案する。兄はいやがったが結局仕事の道具を交換する。兄の釣り針を借りて山幸彦は海辺で釣りをしてみた。しかし1匹も釣れない上に、釣り針を魚にとられてしまう。兄は釣り針を返すように言う。弟は五百の釣り針を作って償うと言ったが、兄は自分の釣り針を返せと言う。

‘謝ったのに許さなかったひどい兄貴’と古事記には書かれている。古事記の作者たちは山幸彦の末裔なのだから仕方がない。

山幸彦が悩んでいると塩土翁が

「私がいいことを教えよう！ 隙間のない竹かごを作って海の底の綿津見(ワダツミ)神の宮殿に行きなさい。きっといいことがあるから」
とおせっかいなことを言う。

竹かごに乗って竜宮城に行くと、そこにはトヨタマヒメがおり、気にいられて即結婚する。毎日飲めや歌えの大パーティー。月日の過ぎるのを忘れた。

「あれれ、浦島太郎のはなしじゃないか。」

おなじ出所のお話だろう。

山幸彦も浦島太郎と同じく月日のたつのも夢の中になる。竜宮(りゅうぐう)というのは琉球(りゅうきゅう)に音が似ているが、これは何か意味があるかもしれない。

その竜宮城で山幸彦は3年も過ごした。ある日彼が「フーツ」とため息をついたのを見てトヨタマヒメは理由をたずねる。なくした釣り針は赤鯛ののどにかかっていた。釣り針を持って故郷に帰り、兄に渡すことにした。

帰り際に綿津見(わたつみ)神は、山幸彦に言った。「きっとお兄さんはあなたが成功したことをねたみ、恨んで攻めてきます。その時にはこの『塩満玉』を出して兄さんを溺れさせなさい。許してくれと言ったら『塩乾玉』を出して生かしてやりなさい」、

実際にその通りになり、お兄さんの海幸彦は「これ以降、あなたの守り人になります」と謝った。海幸彦の子孫が「隼人」で、いまも溺れたときの仕態をして天皇にお仕えしていると古事記には書いてある。古事記の作者は山幸びいきだから仕方がない。



<青木繁:わだつみいるこの宮>



<対馬 和多都美神社 鳥居が海に並んでいる>

■ 対馬にも竜宮城がある

竜宮城は琉球城ではないか、と書いたが、インターネットを見ると綿津見神社が対馬にある。さっそく博多からフェリーで厳原へ。そこからリアス式の多島海である浅茅湾につくと何と「アマテル神社」があった。ここも神話の里のようだ。

豊玉町に入ると「和多都美(わたつみ)神社」の標識があった。赤い大きな鳥居をすぎて、高台から見下ろすと、海から来る神様を迎えるように社殿に向けて一直線に5本の鳥居が海に浮かんで連なっている。なかなかいい感じだ。

祭神であり海の神様の娘であるトヨタマヒメの墓もある。神社の背後の森と巨木の中の磐座がそれだ。これは古い形式の神社だ。私の感ではここも竜宮城だ。

しばらく佇んでいると、次々に来る観光バスがくる。乗客は全部韓国人。海に並ぶ鳥居の先は釜山で、和多都美の神は朝鮮半島から来たと彼らは信じている。この和多都美神社の方が対馬一宮の海神(わたつみ)神社よりも人気があるそうだ。和多都美神社があるのは祭神にあやかって「豊玉町」である。

日向三代と言うから、天皇家のふるさととは南九州の日向だと考えていたが、トヨタマヒメの竜宮城は南方にも北方にもあるようだ。日向三代の時代にさまざまな民族の融合があったことを暗示しているのだろう。

■ 5-5 青島神社、山幸彦が竜宮城から戻ってきた！

二代目ホオリ命(山幸彦)を祭る神社は、鹿児島神宮や対馬の和多都美神社だけではなく、宮崎県の青島神社も有名だ。ここ青島神社は、山幸彦が綿津見の宮、竜宮城から、海幸彦の釣り針をもって帰って来た



<青島 鬼の洗濯板 森の中に青島神社> (宮崎県観光協会の写真)

場所に建てられた。

青島は宮崎市の日南海岸にあり、周囲を鬼の洗濯岩と呼ばれる隆起海食台で囲まれた小さな島だ。社殿の背後には熱帯の樹木がうっそうと茂り、神秘性が感じられる。全島重要文化財になっており、昔は島全体が禁足地で、渡ることもできなかったが今は橋がかかって観光地化している。

祭神は山幸彦(ホオリ命)＝「彦火火出見命」(ひこほほでのみこと)と豊玉姫命(とよたまひめ)のご夫婦と、竜宮城へ案内した塩筒大神の三柱だ。

山幸彦と豊玉姫の結婚は古事記神話の中ではかなり重要な意味を持っている。二人のロマンスの話は数多くの絵画に残されている。青島神社の入口に立つ碑の中には青木繁の描いた「わだつみいろこの宮」の絵がある。

豊玉姫(トヨタマヒメ)の「豊」は地名として残っている。九州の豊前・豊後は「豊」を二つに分けたもの。東京にも豊島区、あるいは練馬区の豊玉など「豊」がある。ついでに東京都の多摩川も豊玉のタマかな?とも思っている。最近私は「トヨ」という名前に深い関心を持っている。

■ 鵜戸(うど)神社 祭神:鵜葺屋葺不合命と玉依姫

青島神社から日南海岸をさらに都井岬の方に進んだ断崖海岸にこの神社がある。交通の便は悪いので、私はレンタカーを借りた。そんな人に来ないだろうと思ったが、断崖の途中にある朱塗りの立派な神殿には大勢の人がお参りに来ている。

トヨタマヒメ(豊玉姫)がお産のために海の宮殿から、山幸彦のいる地上へやって来る。山幸彦は急いで産屋を建てたが、まだ屋根を鵜の羽で屋根を葺かないうちに子どもが生まれた。この方が鵜葺屋葺不合命(うがやふきあえずのみこと)で、初代神武天皇のお父さん。産屋跡が鵜戸(うど)神社である。



山幸彦の奥さんのトヨタマヒメは産屋に入るまえに言う。

「子どもを生む私の姿を見ないで！」

山幸彦は「見るな」と言われたらみたくなった。のぞいたら、奥さんはワニの姿で這いまわっていた。

「見るなと言ったのに見たわにー！」

姿を見られた奥さん恥じて、子どもを置いたまま海の宮殿に帰った。

ワニ＝和邇。天皇家は和邇という海神族の血が流れていることを暗示している。

鵜戸神社はけっこう恐ろしい場所にある。日向灘の荒波によって穿たれた洞窟のなかにある社殿に行くには、絶壁を下らなければならない。よくこんな場所に神殿を作ったものだ。洞窟の床は天井から滴り落ちる水で濡れ、なお磨かれている。薄暗い洞窟内を見ると、ワニの姿で床を這いまわりながらお産をしている姿を思い浮かべ、不気味になる。かなり恐ろしいので早々に引き上げるが、この強烈ワニパワーにひかれて大勢の若い人たちがやって来ていた。

神社の背後の山の上にはウガヤフキアエズ命の墓がある。神様にも墓があるのか疑問もわくが、日向三代は神と人間をつなぐ役割を持った方々なので、墓があってもおかしくない。海から昇るとかなりの高低差で大変。軽い気持ちで上がっていったが、汗びっしょりになった。宮内庁の「陵墓参考地」として保護されている。しかし、これは古墳ではなく、ただの山の頂上。しかし神の依り代としては、いい場所だが。

■ 西都原(さいとばる)古墳群にはニニギ命の墓がある。

ウガヤフキアエズ命の墓を見たが、初代ニニギ命にも墓がある。梅原猛さんは天孫降臨のあと狭い高千穂から広大な西都原にでて勢力を広げたと解説している。

西都原を訪れてみると、とんでもなくたくさん(311 基)の古墳がある。

「なるほど、ここには強大な勢力があった！」

その中で最大級の2つの古墳が

「男狭穂塚(おさほづか)」＝ニニギ命

「女狭穂塚(めさほづか)」＝コノハナサクヤヒメと伝えられている。

この二つも「陵墓参考地」で、宮内庁は天皇家と関係する陵墓と考えている。

しかしこの古墳は4世紀から5世紀のもので箸墓古墳よりも100年以上も新しい。ニニギ命は降臨した最初の大王だから、計算すると紀元前14世紀ごろに相当する。

正確に時代を考えたら、そんなことありっこないが、神さまは時間も空間も自由に行き来するので、それもありだろう。



■ 5-6 三代目、ウガヤフキアエズ命は乳母のタマヨリヒメと結婚する

母トヨタマヒメは、出産の姿を見られたのを恥じて、生まれたばかりの鵜葺草葺不合命(うがやふきあえずのみこと)を陸上において竜宮城に帰った。しかしヒメは残した子どもが心配で、乳母として妹のタマヨリヒメ(玉依姫)を地上に送り、育児を頼んだ。子どもはすくすくと育ったが、話はちょっと面倒になる。

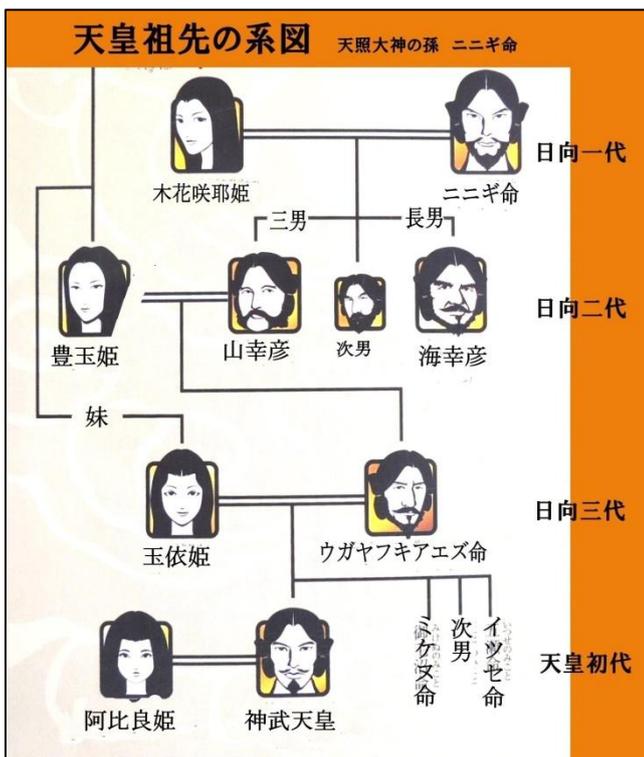
その乳母のタマヨリヒメとウガヤフキアエズ命が結婚する。親子ほどの年齢の差があるが、まあ神話だからたいした問題ではない。天孫の一族と海神系の絆が重視された物語なのだろう。

結婚して四人の子どもが生まれ、その一番下の子がのちに神武天皇になる若御毛沼命(わかみけぬのみこと)である。兄の御毛沼命(みけぬのみこと)は高千穂神社の主祭神で、東征にはついて行かず、地元のために働いた神さまである。

私はまた余計なことを勧ぐるが、「乳母」は子どもを生んだばかりの女性のはずだ。だからタマヨリヒメには神武天皇よりもちょっと年上の子がいたはずだ。東征に付き添った長兄の五瀬命、高千穂神社の御毛沼命らは、ウガヤフキアエズとの子どもではなかったのではないか。したがって長兄らが日向三代を引き継ぐことはなく、末子のワカミケヌ命が天孫系の後継ぎになった。

- ニニギ命＝コノハナサクヤヒメ、
- 山幸彦＝トヨタマヒメ、
- ウガヤフキアエズ命＝タマヨリヒメ

の三世代からひきつづいて、神武天皇が初代のヤマトの大王になる。



しかしなぜこんな複雑な系図にしなければならなかったのかあまり意味がわからない。おそらく歴史的にはヤマト政権の発足までには複雑な政権争いがあったことに原因があるのだろう。どの氏族も大権力をもつ大王家との関係が続けたくて、むりやり古事記に書き入れてもらったのではないか。

■ 宮崎神宮(祭神:神武天皇 奥さんの名前はない!)

宮崎神宮は初代の神武天皇を祭る神社で、ちょっとないくらい立派だ。昭和天皇をはじめとして皇族の方々の参拝も多かった。しかしここが本当に神武天皇の宮だったかと言えば、それはちょっと疑問がる。

江戸時代には神武天皇を祭る一地方のちいさな社だったが、明治維新の王政復古「神武創業の始め」の大王令で急に脚光を浴び、明治6年に、神武天皇の最初の宮と

して特別待遇になり、同8年に国幣中社、同18年には官幣大社へと破格の大出世をした。しかし先の三代はご夫婦で祀られているのに、この神社は旦那さまだけ。これはちょっとおかしい。立派な神社なのだが、あまり神秘性パワーは感じられなかった。

実は奈良県の橿原神宮も、明治になってから明治天皇の号令で造られたもので、神宮の歴史は新しい。しかし宮崎神宮も橿原神宮も、明治の時代になって大号令で作られたとは知らなかった。もともとこの地で尊敬が高かったのは日向一宮の都農神社で、その祭神は大国主命である。これはいったい何を意味するのか、ちょっと不思議だ。

■ 5-7 ニニギ命の前に、高天原から神々が降臨していた

天孫降臨は、天照大神の孫であるニニギ命の降臨であるが、その前に何回か高天原の神さまが出雲に下っていると古事記に記されている。最初の神さまは高天原を追放されたスサノオ命だが、その後天のホヒ、天のワカヒコという神が派遣されている。しかし天のホヒは大国主命にとりいって地元の神になり、高天原には戻ってこなかった。次に派遣された天のワカヒコは大国主命の娘の下照姫と結婚して、自分が出雲を乗っ取ろうとした。派遣した神の言い分を聞くためにキジが派遣されたが、天のワカヒコは使者のキジを射抜いてしまった。その矢は高天原まで届いたが、天照大神に代わって勢力をもった高木の神がその矢を投げ返すと、天のワカヒコに当たって、彼は亡くなってしまった。

大国主命の国はなかなか強力だったので、高天原国は何回にも分けて葦原瑞穂の国に攻撃をしかけていたことが話の下敷きになっている。古事記を注意深く読むと、天孫降臨の前に神さまの降臨があったことが、書かれている。

葦原瑞穂の国の大国主命は、二人の神さまに手助けをしてもらって国を造った。

■ 少彦名神(すくなびこな) = 一寸法師 = アメノホヒ

大国主命が美保の岬にいるときに波の上からガガ芋の舟に乗ってやってくる小さな神があった。もの知りの「山田の案山子」に尋ねると、小さな神は高天原の神の子だった。この神は大国主命と協力して葦原中国を造り固めた。しかし三年たったある日、黄泉の国にスタスタと行ってしまった。

……古事記に一章を設けて書かれているが、なぜこの神が重要だったか分からなかった。しかしこの神さまが高天原から派遣されたアメノホヒであるとするれば、納得がいく。高天原の側からみれば裏切り者だが、大国主命の側から見れば建国の協力者ということになる。しかし高天原勢力によって、三年後に処分された。大国主命側からいえば、理由もなく突然黄泉の国に旅立っていった。

■ 大物主命 = アメノワカヒコ……ニギハヤヒ神

最初のパートナーである少彦名神が突然いなくなり、大国主命が途方に暮れていると、海のかなたから光り輝いてやってくる神があった。その神は

「わたしの魂をよく祀ることができなかつたら、国造りは難しいだろう」と言った。それを聞いて大国主命は「それなら、どうお祀りしたらいいでしょうか？」と尋ねると、光り輝く神は答えた。「わたしを、ヤマトを囲む緑の山の東の山(三輪山)の上に祀りなさい！」この神が三輪山の頂きにおられる神さま、大物主(オオモノヌシ)命である。

古事記によるとアメノホヒの後に高天原から降臨するのはアメノワカヒコである。二番目の協力者は大物主命はアメノワカヒコとイコールであることになる。

三輪の神＝大物主命＝アメノワカヒコ である。

アメノワカヒコは大国主命の娘である下照姫と結婚する。大物主命は箸墓に祀られているモモソヒメと結婚する。すなわちモモソヒメと下照姫は同じ方である。

さらに モモソヒメ＝ヒミコ と私は考えているのだが、そのような説はすでに第一旅でも指摘したように、今の和歌山では常識になっている。



<生駒山のおもとにある石切剣前神社:ニギハヤヒを祀る>

実はもうひとつ古事記には変なことが書かれている。神武天皇がヤマトに入る時に浪速で抵抗し、神武天皇の兄のイツセを射殺したのはナガスネヒコとニギハヤヒの神であると。

ニギハヤヒは天の磐舟から飛び降りて、地元のナガスネヒコとともにヤマトの国を造る神で、ニギハヤヒも高天原の神であるとしている。ニギハヤヒはナガスネヒコの妹と結婚し、勢力を拡大した。しかし神武天皇が紀伊半島をまわってヤマトに入った後は、

協力して国を盛りたてたとしている。しかし高天原神話にはニギハヤヒのことはまったく書かれておらず、突然ニギハヤヒの名前が出てくる。

いろいろな説をごちゃ混ぜにした私の解釈を表にする次のようになる。○の中の番号はご夫婦を示している。①のヒミコの夫はだれと言うことになるが、ヒミコは独身とされているので、この表では夫は存在しない。しかし神さまとの神婚は、巫女さんと同じで、独身と言ってよい。すなわち大物主神の奥さんだったのがヒミコさんと言うことになる。

①ヒミコ＝②モモソヒメ＝？＝③トミヤヒメ(ナガスネヒコの妹)＝？＝④下照姫

②大物主命＝③ニギハヤヒ命＝？＝④アメノワカヒコ

国を譲られたはずの天孫がヤマトに入るのに苦労したのは歴史的事実の反映だろう。しかし古事記の作者は、国譲りは侵略ではなく正当性があることを示すために、いつとき誤解はあったが、前から高天原の神を送って準備はしてあったと言いたかったのだろう。

紆余曲折を経てヤマトが成り立つのだが、まずい事実を全部隠しきれないので、小出しにして物語を造っていったというのが、実情だろう。

神武東征の前には、大国主命が懐柔した大物主命(=ニギハヤヒ=アメノワカヒコ)とその奥さんがヤマトを統治していた。大物主命の奥さんはヤマトトヒモソヒメ。すなわちヒミコである。それを知ってか、知らずか、神武天皇は南九州を船出してくる。